

# 混合保育に関する研究

大久保 和 子

## I. はじめに

最近、保育園や幼稚園では年齢別にクラスでまとまって活動する保育が見直され、「解体保育」「コーナー保育」とか「縦割保育」などと呼ばれる形態が実践されつつある。

保育園では入園対象が0歳から6歳までの家庭保育に欠ける乳幼児となっていて、基準では年齢別の1クラス定員が定められているにもかかわらず、実際には同年齢クラスを編成することは不可能な場合が多い。しかも、県内の保育園には1園の定員が30名～90名のところが約80%を占め、100名以上のところは余り多くない。したがって、この定員の範囲で6～7階層の年齢別クラスを編成することは困難であり、年齢混合のクラス編成を余儀なくされることになる。

これに対して幼稚園は年齢別クラス編成を原則としており、保育園においてもクラスはできるだけ同じ、もしくは近い年齢の子どもによって編成するよう「保育指針」に示してあるため、年齢混合のクラスで保育することはマイナス要因が多いと問題視される傾向が強い。しかし、現在では核家族化、兄弟数の減少化、地域集団の希薄化など子どもたちを取りまく社会環境の変化は著しい。このような状況の中で乳幼児期の社会性の発達の諸問題を深刻に受けとめ、積極的に解決しようとするならば、従来のクラス中心の閉鎖的保育は再検討されなければならないであろう。

さらに、年齢混合の保育に対しても保育者の扱いにくさや保育効果のマイナス面を強調するだけでなく、より豊かな人間関係が育つ保育として、その方法を積極的に研究する必要があるのではないだろうか。しかしながら、その実践はまだ試行の段階で、子どもの実態に即して無理なく異年齢の子どもが交流できる有効範囲、必要条件、展開方法などは未だ明らかにされていない。

本研究は、積極的に混合保育を実施した2つの保育園の実践からその手がかりを得ようとするものである。

## II. 研究方法

- (1) 昭和58～59年度、倉敷市T保育園における「縦割保育」の実践記録の分析
- (2) 昭和58～60年度、備前市M保育園における「解体保育」の実践記録の分析

なお、資料分析の観点は異年齢交流のあった場面を重点的に行う。

## III. 研究内容

### 1. 混合保育の方法

#### (1) 保育形態と目標

「混合保育」には2つの意味がある。すなわち、①異なった年齢の幼児をやむなくいっしょに保育すること、たとえば、3歳児が少人数のためこれを4歳児の中に混ぜて保育する場合と、②1つの園やクラスの年齢の枠を取り払い、異なった年齢の幼児を意図的に混ぜて保育することで解体保育、縦割保育がこれに含まれるとする考え方である。筆者は後者の立場に立って混合保育を異年齢交流のための積極的な保育形態として広義にとらえ、その具体的方法として縦割保育、解体保育、合同保育を考える。

縦割保育とは明確な意図をもって異年齢の幼児をグループまたはクラスに編成し、そこには1名ずつの担当保育者がいる。解体保育はクラスの枠をはずして全園児が自由に誰とでも交流できるようにし、遊びのコーナーなどを設定することから「コーナー保育」とも言われる。幼児へのかかわり方は全園児を全保育者が担当する場合とコーナーに1名ずつの担当保育者がつく場合がある。

そのいずれもが同年齢クラスに固定しないで異年齢の幼児集団の中で年長児と年少児の相互関係をとおして培われる様々な保育効果を期待して行われる保育である。これらの他にも年齢の異なる複数クラスを合同で複数の保育者が協力して保育する合同保育も混合保育と言えよう。

縦割保育と解体保育の実施にあたって、T保育園とM保育園の基本姿勢は同じである。すなわち、両保育園はともに同年齢クラスを基本として、幼児が保育園の生活に慣れ、集団適応がかなり促進された段階から混合保育を開始していることである。表1でもわかるようにその時期はともに7月ないし8月としており、T保育園ではそれ以降3月までの3期間にわたって週1回の縦割保育とコーナー保育を適宜に組み合わせている。その間、夏季には1週間のうち前半を縦割保育にし、後半は同年齢クラスの保育にしている。これに対して、M保育園では7月から12月までを解体保育の実施期間とし1月以降は再び基本クラスの保育に重

点を移している。この他にも縦割保育の方法は年度当初に同年齢と異年齢の2通りのクラス編成を行い、混合クラスを基本にして同年齢クラスの保育を導入している幼稚園もあるが、この方法は研究的、実験的な域を出ず一般化されるに至っていない。

次に、混合保育を実施する目的は表1の目標からもわかるように、意図的あるいは自然的に形成される異年齢集団の中で相互に遊ぶ楽しさをとおして社会的態度の育成をはかり、年長児としては自覚や責任感やいたわり、また年少児としては、信頼、感謝などの心情を体得させようとしている。

表1. 混合保育の目標と形態

		I 期		II 期		III 期	IV 期
		4 月 ~ 7 月		8 月 ~ 10 月		11 月 ~ 12 月	1 月 ~ 3 月
T 保 育 園	目 標	・年齢別やグループ別の活動に重点をおき、一人ひとりが安定して遊べるようにする。		・コーナーや縦割保育の中で意図的に異年齢とのふれ合う機会を多くもたせ、世話のし方や思いやりの態度をもたせる。		・年長児としての自覚をもたせる。	
	形 態	年齢別保育		縦割保育		コーナー保育	
		年長児に誘われたらいやがらずに遊べるようにする。		年長児の模倣をしながら一緒に遊ぶ楽しさを味わせる。			
M 保 育 園	目 標	・情緒の安定を図り、自分で遊びを見つけて遊べるようになる。		・異年齢との交流の中で生活経験を広げ遊びの楽しさを味わい社会性が身につくようにする。		・同年齢集団を母体として一人ひとりが自己充実した遊びをする。	
	形 態	年齢別保育		解体保育			

## (2) 保育内容

混合保育に適切な保育内容はなにかを探ると表2にみられるように「ごっこ」に関する活動が最も多く取り上げられており、その種類も多いことがわかる。これは幼児が日ごろ憧れていたたり尊敬しているものになり切って遊ぶことができ、その遊びの中にさまざまな役割やルールがあり、遊びの段階に即した発展性があるので年長児も年少児もそれぞれが遊びに参加できるからであろう。ついでに行事的な活動であるが、これは少人数よりも多人数の方が活動に盛り上がりがあり、年齢に応じた参加のし方ができるという活動の特色のためであろう。園外保育の場合は往復の交通安全や自然の中での自由な活動、集団遊びでは遊びの伝承、生活指導ではモデルと模倣や技術的援助、砂遊びや製作やブロックなどは集団適応の段階にあった遊びができ

表2. 混合保育の内容

	幼 児 の 活 動			
	活 動	備 考		
ご っ こ	ままごと	＊ ＊	運 動	幼児体操 ＊ ＊
	のりもの遊び	＊ ＊		かけっこ ＊ ＊
	お店ごっこ	＊ ＊		ボール遊び ＊
	探検ごっこ	＊ ＊		マット遊び ＊
	おまつりごっこ	＊	生 活	食 事 ＊ ＊
	宇宙ごっこ	＊		午 睡 ＊
	病院ごっこ	＊		集団遊び ＊ ＊
	レストランごっこ	＊		砂(土)遊び ＊ ＊
	運動会	＊ ＊	そ の 他 の 遊 び	製 作 ＊ ＊
	お正月遊び	＊ ＊		水遊び ＊ ＊
行 事	七夕まつり	＊ ＊		ブロック ＊ ＊
	発表会	＊		小動物との遊び ＊
	豆まき	＊		プール遊び ＊
	お月見会	＊		折り紙 ＊
園 外 保 育	虫とり	＊		積み木 ＊
	河原で遊ぶ	＊		
	いもほり	＊		
	みかん狩り	＊		

るなどが混合保育に適した点と考えられる。しかし、運動的な活動は年齢、個人によって能力差が非常に大きいことや遊びに競争的な要素が多いなどの点から混合保育の内容として適切かどうかは指導の方法と併せて、今後検討する余地があるであろう。

### (3) 保育の日程

混合保育を導入する場合、基本クラスの保育との関連はどのように考えたらよいのだろうか。図1一(A)、(B)に共通していることは、同年齢クラス、混合クラスのいずれであっても登園の活動、食事、降園の準備などの生活は基本であるクラスの活動となっていることである。同年齢クラスが基本である場合には、年齢の

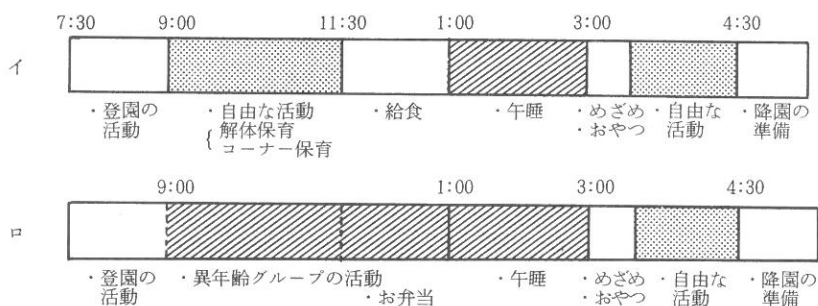
発達段階に即応した生活指導を重点におきながら、遊びの場で幅広い年齢の幼児が自由に交流できるように計画をしている。午睡を混合の集団で行うのは施設の関係上やむを得ない場合が多いので、午睡の前後の活動、午睡時間等を考慮すると同年齢クラスの活動が望ましいであろう。

縦割保育を週1回取り入れることは活動が断続的になるので活動の選択、配列が大切になる。

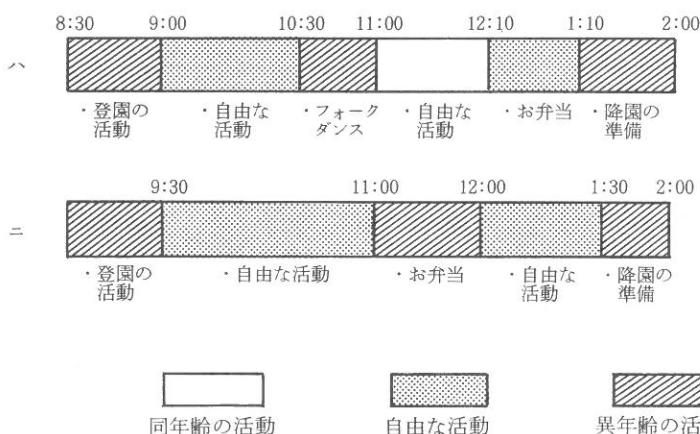
混合クラスを基本とする(B)の場合には、意図的な異年齢の活動から自然な異年齢活動へと流れていくように組まれており、同年齢だけの活動は1日に1回程度でかなり少ない。

図1. 混合保育の一日の流れ

#### (A) 同年齢クラスを基本とする場合



#### (B) 混合クラスを基本とする場合



## 2. 混合保育の効果

### (1) 「ごっこ」における異年齢交流

#### ① 「ごっこ」の参加状況

図2はM保育園における解体保育の「ごっこ」の発展事例である。この保育園は地域の特性により在園児

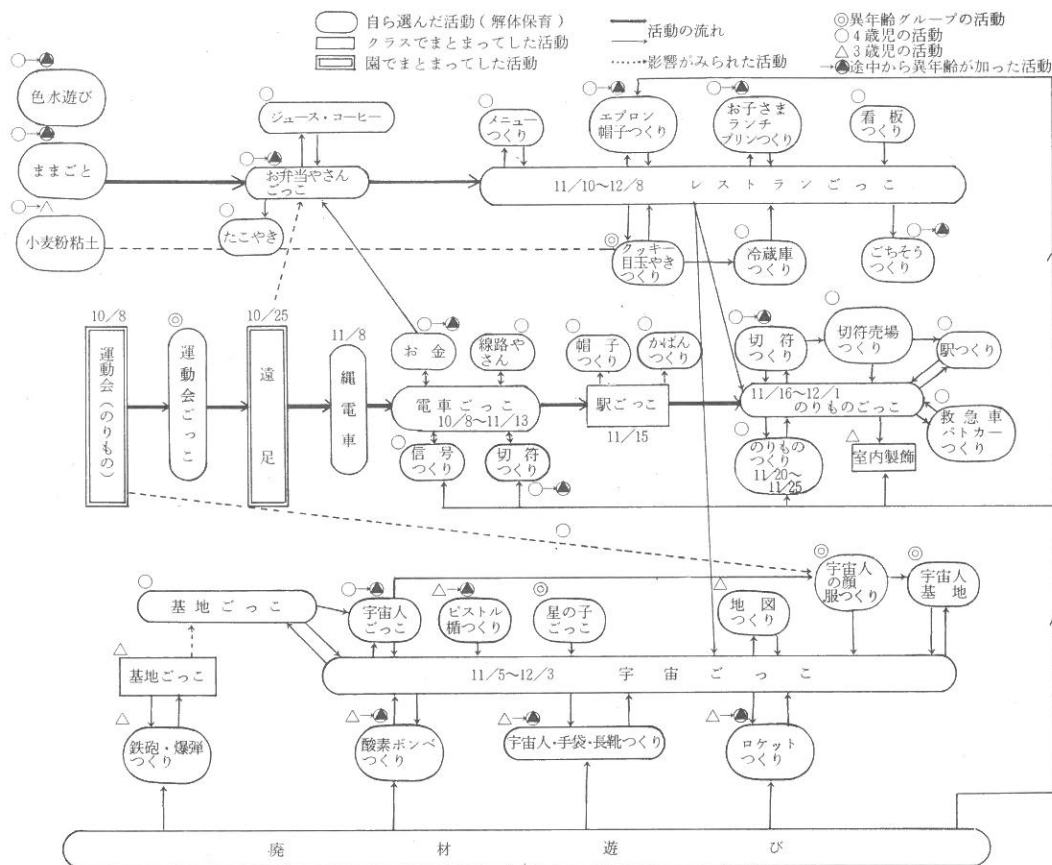
の90%が3歳と4歳の幼児で、1～2歳児はわずかである。年齢別クラスを基本として混合保育を7月から導入し、11月上旬～12月上旬まで持続、発展した遊びの参加状況を異年齢交流の面から調査すると、最初から異年齢交流がみられた遊び(◎印)は宇宙ごっ

この宇宙人基地、宇宙人の服や顔をつくる活動などわずかである。これに対して、4歳児が始めた遊びに3歳児が加わり（○→△印）、3歳児の活動に4歳児が加わって（△→●印）、自然に異年齢グループの遊びが展開しているものが非常に多い。このことは、「ごっこ」

この遊びが異年齢交流の場になり易く、そこでの遊びがかなり発展することがわかる。

これら「ごっこ」の遊びでは、年長児と年少児はどのような関係にあるのだろうか。次の2つの事例分析から探っていきたい。

図2. 「ごっこ」発展と参加状況



## ② 「お店ごっこ」における年長児の役割

図3は5歳児11名、4歳児12名、3歳児3名が「お店ごっこ」のコーナーで異年齢の幼児と交流をもちながら遊んだ事例である。銀行や花屋などのグループは幼児がそれぞれ自分のやりたい役を選んだものであるから、その人数も年齢構成もさまざまである。この実践例を全体的に考察すると人数の差はあってもどのグループも遊びの経過に従ってグループ内でのかわりが広がっており、遊び全体が活発に展開されたものと思われる。また異年齢で構成されているお店ではいずれも5歳児が中心になっており、他の幼児は年齢に応じた役割で参加していることがわかる。

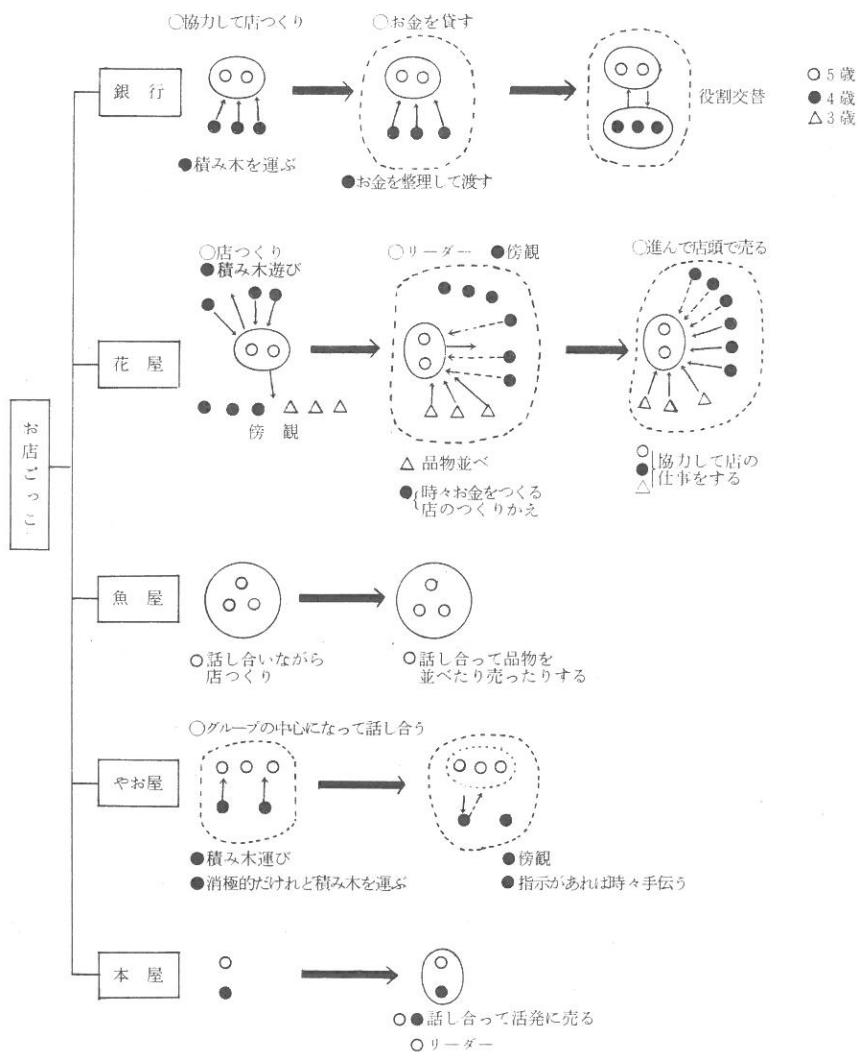
なかでも花屋は各年齢の幼児が集合し、人数も多いがよくまとまっている。はじめは5歳の幼児2名が中心になって年少児に指示を与え、4歳児の3名がこれに従って積み木を運んでくる、それを組み立てて店を作るという協同作業をしている。この単純な協同作業を傍観していた3歳児3名が次の段階では積極的に参加し、店の仕事を手伝っている。こうしてグループ内の人間関係が少しずつ広がっていくと仲間意識もしだいに芽ばえ、遂に11名全員が花屋の一員となって遊びを楽しんだものと思われる。この他のどのグループでも5歳児が中心的存在になって遊びの場やイメージづくりをしていることに注目しなければならない。特

に本屋の5歳児は同年齢クラスでは疎外され勝ちな幼児であるが年少児との2人組になると年長児らしく活発に行動したり、協調的な態度をあらわしている。

このことから異年齢集団では5歳児が年少児から年

長児として認められるとその立場や意識をもって、どの幼児もリーダー的な行動がとれるようになることがわかる。

図3. 「お店ごっこ」の異年齢交流



### ③ 「おばけごっこ」における年少児の活動

図4に示す「おばけごっこ」は5歳と3歳の幼児がかかわりながら展開した事例である。

この遊びを年少児の立場から考察する。

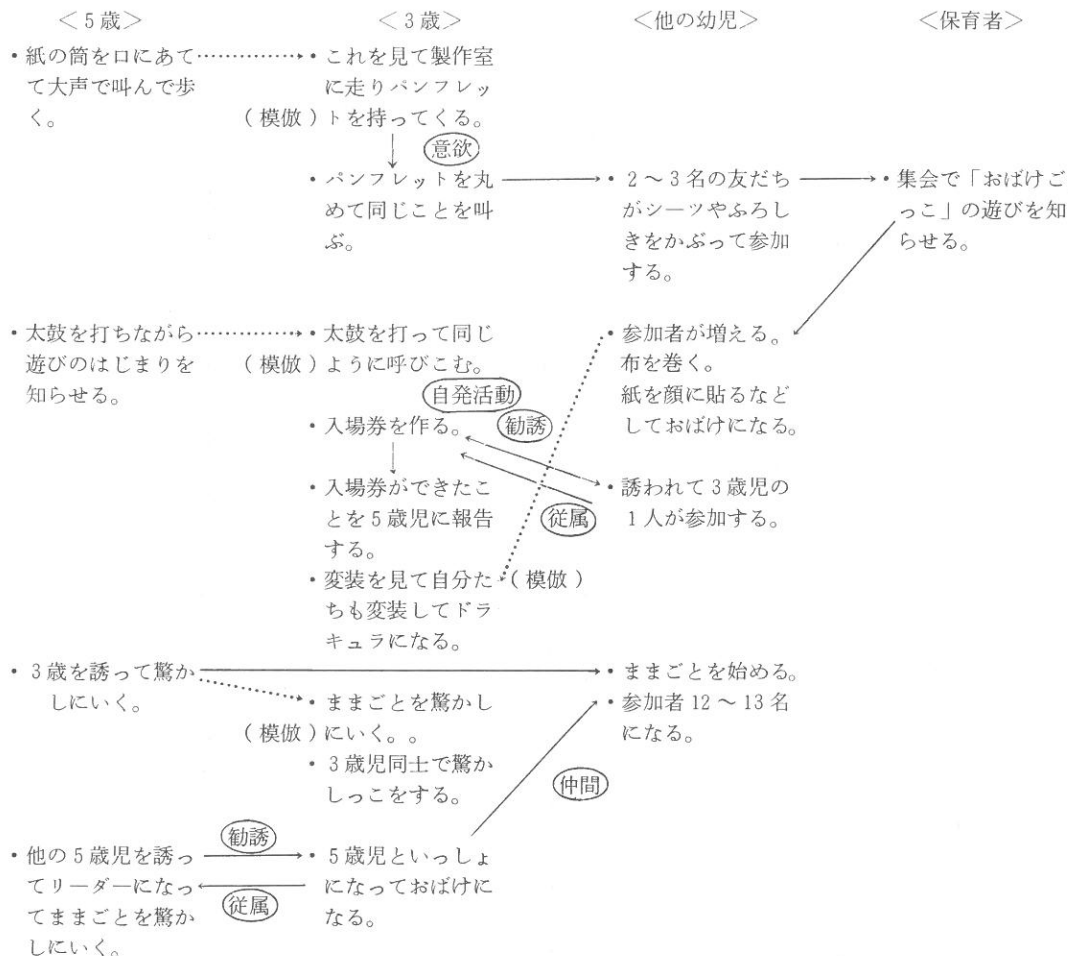
こゝにみられる3歳児の活動は自分から目的性をもったものはほとんどみられず、他からの外的刺激に影響された模倣性の強いものと直接勧誘されて同調する

従属的なもののばかりである。しかし、遊びの内容は3歳児だけではみられないレベルのものが展開されている。それは年長児の遊ぶ姿を直接みることにより、自分も同じ行動をしようとする意欲、同じ活動ができた一体感、それによって仲間が増え、遊びが楽しくなる。この一連の活動をとおして年少児は心情的にも能力的にも充実した、より豊かな経験を味わうことになる。

次に、年長児が年少児に及ぼす影響性から考えると遊びの発生、展開の場が重要な条件になるのではないだろうか。年長児の遊びが年少児にとって見えやすい場所で展開されると年少児は自然に興味づけられ、遊

びに誘導され、参加していくのである。さらに、オープンな環境は遊びが展開し持続すればする程異年齢の交流を促す有効な条件になっていくものと思われる。

図4. 「おばけごっこ」の展開



## (2) 縦割保育における異年齢交流

### ① クラス保育にみられる「いたわり」

表3の事例は5歳～1歳の幼児30名の縦割クラスで「面つくり」を中心にした指導の分析である。本日のねらいが年少児に対するいたわりの気持をもたせようとしているので、保育者の配慮が幼児が困っている場面、能力的に低い幼児、技術的に未熟な行動などに気づかせ、年長児のやさしい気持と助力の行動を導き出そうとしている。この指導過程のなかで年少児に対する4・5歳児の働きかけは外的なものだけでなく、心情的な行動が多くみられる。製作活動では1歳児が

「お兄ちゃんかいて」と5歳児に依頼すると「いいよ」と快く手助けをしたり、面を逆さにかぶっている3歳児をみつけて直してあげる4歳児の行動などは見ていてほえましいものである。

また排泄、食事、午睡、返事をする、椅子に座るなどの日常的活動においても、年少児の未熟な行動に対していたわりの気持をもち、家庭的な雰囲気や自然に手助けができる。また年長児のこうした親切や世話に対して年少児が感謝の気持を抱いたり、「ありがとう」の言葉を素直に言うことも見逃せないことである。これらの経験は直接にかかわった幼児だけでなく、身近

かで見ているクラスの幼児にとっても重要な経験となるであろう。

年長児と年少児の関係は強者と弱者になったり、またあるときは兄と弟であったり、指導者と子どもになったりする。だから年少児は年長児から暖かい保護を受けたり、甘えを受け容れられたり、励まされたり、

指示されたりする。

子どもの「思いやり」は親や周囲の人たちから「思いやられる」ことによって発達するので、年齢差の大きい縦割保育は自己中心的な幼児が他者の気持を汲む能力を発達させる重要な場と考える。

表3. 縦割クラスの保育展開

9/13 いちごグループ

主題	面づくり	5歳 4名 4歳 7名 3歳 10名 1・2歳 9名	ねらい	かかわり方	
時間	幼児の活動	指導上の留意点		かかわり方	
9:20	○白ボール紙に色をぬる。	・3歳以上児が協力してぬり、作るよこぎをを持たせる。	5歳 5歳 4歳 3歳 3歳 3歳	・ぬり方を教える。 ・石けんの使い方を教える。 ・3歳児が4・5歳児といっしょに迎えに行く。	
10:00	○筆を洗う。 ○1・2歳児を迎えに行く。	・一緒に遊んだり、困っているときに助けてあげる気持を持たせるようにする。	5歳 1歳 4歳 5歳 3歳 1歳	・返事のできない幼児に返事をするように促す。 ・依頼すると援助する。	
10:10	○年長児の間に1・2歳児を座らせる。 ○名前を呼ばれたら返事をする。 ○面を作る。	・面作りのできない幼児に対し、できる幼児が手助けをするように促す。	4歳 5歳 3歳 4歳 2歳 4歳	・援助されると「ありがとう」を言う。 ・リーダーの指示に従って協力する。 ・誤ったかぶり方を訂正してあげる。 ・かぶり方を援助する。 ・手つなぎをして連れていく。	
	○片づける。	・協力することに気づかせる。	4歳 5歳 3歳 4歳 2歳 4歳	・着脱の援助をする。 ・着脱の誤りを訂正する。 ・適切な椅子と交換して座らせる。 ・エプロン・おしぼりの世話をする。 ・食事を励ましながらさせる。	
	○面をつける。	・面のつけにくい幼児に手助けをする。	4歳 3歳 3歳 2歳 5歳 2歳	・正しいし方を注意する。 ・脱衣の手助けをする。 ・脱いだ服のたたみ方を指導する。	
11:30	○排泄をする。	・自分でしようとする気持を大切にしながら年長児のかかわり方をみまもる。	5歳 1歳 4歳 5歳 3歳 1歳 5歳 2歳		
	○食事をする。		5歳 1歳 4歳 1歳		
12:00	○排泄する。 ○午睡の準備をする。	・着脱を見守りながらできにくいところを手伝うようにさせる。	4歳 2歳 4歳 5歳 3歳 2歳		

## ② グループ遊びにみられる遊び方の伝承

意図的に縦割グループを編成する場合には、幼児の性格、知的・運動的能力や基本クラスでの交友関係などを考慮して決めなければならない。

この事例は4歳児2クラスと3歳児2クラスを解体して、できるだけ等質の異年齢集団になるように配慮し、編成した4グループの遊びである。各グループの遊びはメンバーが話し合って決めたものである。これ

によると、①グループは「狼と七匹のこやぎ」の劇遊び、②グループは「花いちもんめ」のわらべうた、③グループはカルタ遊び、④グループは「インド人の黒ん坊」の集団遊びである。

表4から各グループの遊び方を考察すると、②グループと④グループが全員参加で楽しく遊べたようである。遊びの過程で先ず遊び方を共通理解することは必要条件である。知らない3歳児には4歳児が直接教え

る場面もみられるが、遊びに参加して繰り返し遊んでいるうちに次第に遊びのルールもわかり、遊びへの興味も増加していくものである。

また、②グループの4歳児は年少の3歳児をリードしていく重要な役割をしている。同じ幼児が再度指名されると他の幼児や年少児にその機会を与えようと配慮したり、2歳児の参加も承認し、いたわりの行動を示しながらわらべうた遊びを伝え、みんなが楽しく遊ぶための工夫もしている。また、④グループの集団遊びも全員が楽しく遊んでいるが、3歳児が鬼になりたいと言い出すとその欲求を通す場面がある。それ以前

に同年齢の幼児の欲求は厳しく拒否しているにもかかわらず、ルールを教えて受け容れている。以上2つの集団遊びは年長児、年少児がいっしょに遊び、遊び方の伝承もできる縦割グループの遊びとして望ましいものである。しかし、年少児のわがままな欲求や行動に対しては「思いやり」や「いたわり」で容認するだけでなく、保育者の指導が必要になる。

劇遊びやカルタ遊びが発展しなかったのは、童話のあらすじを共通理解していない、文字に対する発達の差が大きすぎるなどが原因であろう。

表4. 縦割グループの遊び

2月4日

		遊 び
① グ ル ー プ	4歳児< 5名	<ul style="list-style-type: none"> <li>○「狼と七匹の子やぎ」の劇あそび(12名)</li> <li>・ になりたい役になってあそぶ。(役割)</li> <li>・ ことばの出ない年少児に教える。</li> <li>○的あて遊び→鬼ごっこ(2名)</li> <li>・ 4才児からルールを教えてもらう。(ルールの伝授)</li> </ul>
	3歳児< 2名 計 14名	
② グ ル ー プ	4歳児< 4名	<ul style="list-style-type: none"> <li>○「花いちもんめ」のわらべうた(14名)</li> <li>・ 同じ名前がでると「さっきしたから違った子にしよう」と言う。(ルールの改変)</li> <li>・ 「なるべく小さい子にしてあげよう」(思いやり)</li> <li>・ ペソをかく年少児を応援する。(励まし)</li> <li>・ 2才児や弱い幼児には手をかす。(援助)</li> </ul>
	3歳児< 3名 計 14名	
③ グ ル ー プ	4歳児< 4名	<ul style="list-style-type: none"> <li>○カルタ遊び(11名)</li> <li>・ とれない年少児にカルタをあげる。(思いやり)</li> <li>○折り紙あそび(3名)</li> <li>・ 折り方を教える。(技術の援助)</li> </ul>
	3歳児< 5名 計 14名	
④ グ ル ー プ	4歳児< 4名	<ul style="list-style-type: none"> <li>○「インド人の黒ん坊」の集団遊び(14名)</li> <li>・ ルールを守っていっしょに遊ぶ。</li> <li>・ 鬼になりたがる3才児に鬼をゆずる。(思いやり)</li> <li>・ 同年令の幼児がルールを守らなかったら、鬼になりたいと泣いてもゆずらない。</li> </ul>
	3歳児< 2名 計 14名	

### (3) 混合保育の効果と問題点

混合保育の指導事例から異年齢のかかわりがみられた20ケースの分析結果を4項目に分類して、表5にあらわしている。

その分類は、(イ)年長児と年少児の相互交渉により、遊びが発表したもの、(ロ)年長児と年少児がかかわり合ったもの、(ハ)年長児が年少児に直接働きかけたもの、(ニ)年長児と直接かかわりはないが年少児が一方的に影響を受けたものの4項目である。

これらの結果から混合保育の効果をまとめる。

① 異年齢グループの遊びでは、年長児がリーダーになって、年少児に遊びのルールを教えたり、お互いの役割を指示したり、技術を指導するなどして遊びを

発展させている。

② 能力的、技術的に発達差がみられる活動では、年長児が相手の気持を思いやったり、手助けをすることにより年少児は成功感を味わい、いっしょに遊ぶ楽しさを体験する。

③ 異なった経験をもつ幼児が互いに自分の力を発揮したり、刺激し合ったり、遊びに誘ったり、協力する機会を通して遊びへの興味を広げている。

④ 欲求のぶつかり合いや勝手な行動が現れると、年長児がけんかの仲裁をしたり、自分の欲求や行動をコントロールし、寛容な態度でその場を収め、遊びを持続させている。

⑤ 園外に出るときには、年長児が保護的な態度で



① 年少児が年長児から過度のいたわりや援助を受けると年少児の自主的な行動が妨げられるのではない

③ 年齢別保育と混合保育を組み合わせる時期によっては、子どもが基本のクラス以外の保育者や友達に対してスムーズに適応できず、活動への興味や意欲が阻止されるのではないだろうか。

(イ) 年長児と年少児の相互交渉がみられたもの

		か か わ り 方				○5歳児	●4歳児	△3歳児	□2歳児	…関接的交渉 →直接的交渉
1	車 つ く り	●みて、やり方 ↓ わかると自 ○分からやる (模倣・意欲)	●車をつなげる ○ (協同)	○新しい材料を指 ↓示する ●素直に返事をし て従う (協力)	○はめ方を指示 ↓ (技術の指導) 協同	○スピードの出る ↓ 車をつくる ●(技術の模倣)				
		○車にのせよう ↓ 誘う ●素直にうなづ いて乗る (遊びの勧誘 →参加)	○運転手を交替する ● (役割交替)	●車に乗るよう ↑ に誘う ○運転手と後押 しを交替する ● (遊びの勧誘) (役割交替)	●相談して遊び方 ○を決める (ルールを守る) (役割分担)					
2	魚 に な っ て 遊 ぶ	○    ●魚のひれをつくる (協同)	○テープをとめてあ ↓ げる ● (助力)	●できあがった魚に ↓ なつて泳ぐ ○みてあげる (遊びの満足)	●変った泳ぎ方に気 ↓ づき泳ぎ方の工夫 ○をする (遊びの発見) →工夫					
3	巧 技 台 で 遊 ぶ	○「ほら穴」つくりをする ↑ ●数人が参加して積み木を 運ぶ (遊びの意欲→役割分担)	○4歳児といっしょに楽し    そうに泳ぐ ●「魚の親子」と言いなが らいっしょに泳ぐ (協同→新しい遊びの イメージ)	●魚になつてほら穴に集る (遊びへの参加)						
4	七 夕 の 準 備	○虫の家づくりをする ●みている (興味づけ)	○招待状の書き方を教える ● (指導)	○招待状の配達をする ● (遊びへの参加)						
5	時 計 つ く り	△じっとみている ○ (興味づけ)	△まねて紙を切る ○ (意欲)	○できにくいところを手伝う ↑ △「ありがとう」を言う (助力・満足・感謝)						
6	ま ま こ と	△遊具の奪い合い △をする	△ ○注意する (けんかの仲裁)	●遊びの場を工夫し ↓ て年少児を誘う △ (リーダー 遊びの勧誘)						
7	お た ま じ ゃ く し 捕 り	○手をつない    で歩く △(いたわり)	○すくったお    たまじゃく しを渡す △受けとって バケツに入 れる (協力)	△川にのぞき ↓ こむ ○危険を知ら せ注意する (保護)	○ザリガニを    バケツに入 れるように 指示する △指示に従う (協力)	○網を貸す ↑ △捕れない ので返す (交替)	●ザリガニの 持ち方を教 える △もつ (技術の伝達 いたわり)			

(ロ) 相互にかかわり合ったもの			(イ) 一方的に直接働きかけたもの		
遊びの種類	か	かわり方	遊びの種類	か	かわり方
おもちゃ探し	○→●2人で探しに行く。	協 同	紙芝居	○→●参加しない幼児を連れ戻す。	指 導
フォークダンス	○→●相手と手をつないで踊る。	仲間意識	製 作	○→●できない幼児に描いたり、作ったりしてあげる。	思いやり→技術的援助
砂遊び	○→○水汲みを手伝う。 ↑ ● ○→●指示に対して素直に従う。 ○→△親切にされたら「ありがとう」を言う。	協 力  協 力 感 謝	図 鑑	○→●知っているものについて教える。	経験や知識の伝達
(ニ) 一方的に影響を受けたもの			のりもの	○→●ルールを守らず走り廻る幼児のために新しい遊び方を提案する。	問題解決のための工夫
遊びの種類	か	かわり方	こ と ば 遊 び	○→●ルールが理解できない幼児をたしなめる。	指 導
登り木	○→●棒のぼりをみて登ろうとする ↓ のぼれるようになる。	模倣→技術の習得	山すべり	○→●相手を誘いにいく。	遊びの勧誘 いたわり
積み木	○→●運び方をまねて道づくりをする。	模倣→遊具の使い方を 知る。	積み木	○→△黙って遊びに参加するのを許す。	寛 容
歌をうたう	○→△うたを聞いていっしょにうたうようになる。	模倣→遊びへの参加	砂遊び	○→△道具の使い方を教える。	技術の伝達
ブロック	○→△つくり方をみて同じような飛行機をつくる。	模倣→遊び方を知る。			

#### IV ま と め

以上、2つの保育園で実施された混合保育の指導を分析し、混合保育の方法、異年齢児相互のかかわり方について検討した結果、

① 保育園で同年齢クラスを基盤にして、縦割保育や解体保育を併せ行うことは、幅広い年齢の幼児が相互に交流でき、自然な異年齢集団の中で抵抗なく社会化していくことが期待できる。

② 混合保育の場では、異なった発達段階の幼児が相互に刺激し合い、助け合い、伝え合う機会をとおして自分と異なる相手の存在に気づき、愛情、信頼、責任感、抱擁力などが養われる。

③ 混合保育の活動として「ごっこ」は最も適しており、年長児と年少児が互いに深くかかわりながら、豊かな経験を展開し、多くの発達課題を達成できる。

④ 保育園において、混合保育を積極的に取り入れることは望ましいことがわかったがその方法については、保育園の規模、地域性、常設のクラス編成など関連的におさえなければならない点が多くある。

⑤ 混合保育を展開するにあたって、環境の重要性について知ることができたが、今後は他の指導の要点も明らかにする必要があることなどを知った。

終りに、本研究にご協力をいただいた2つの保育園に感謝するしだいである。

#### 参 考 文 献

- 1) 村山貞雄編：幼児保育学辞典 明治図書 1980 P257
- 2) 平井信義著：大妻女子大学家政学部研究紀要第18号 1982 P105～115
- 3) 千羽喜代子著：大妻女子大学家政学部研究紀要第13号 1977 P165～178
- 4) 秋田大学教育学部附属幼稚園研究紀要第4号～第6号 1977～1979
- 5) 三重大学教育学部附属幼稚園研究紀要 昭和58年度
- 6) 秋山和夫・森上史朗編著：保育方法と形態 医歯薬出版 1985
- 7) 日本保育学会編：保育形態とその効果 フレーベル館 1981

- 8) 林久雄・吉田宏岳編：保育原理 福村出版 1981
- 9) 鈴木政次郎他編著：たてわり保育 チャイルド本社 1981
- 10) 平井信義編：保育研究VOL.2 No.3 相川書房 1981，多田鉄雄：西ドイツにおける「たてわり保育」

昭和61年3月31日受理